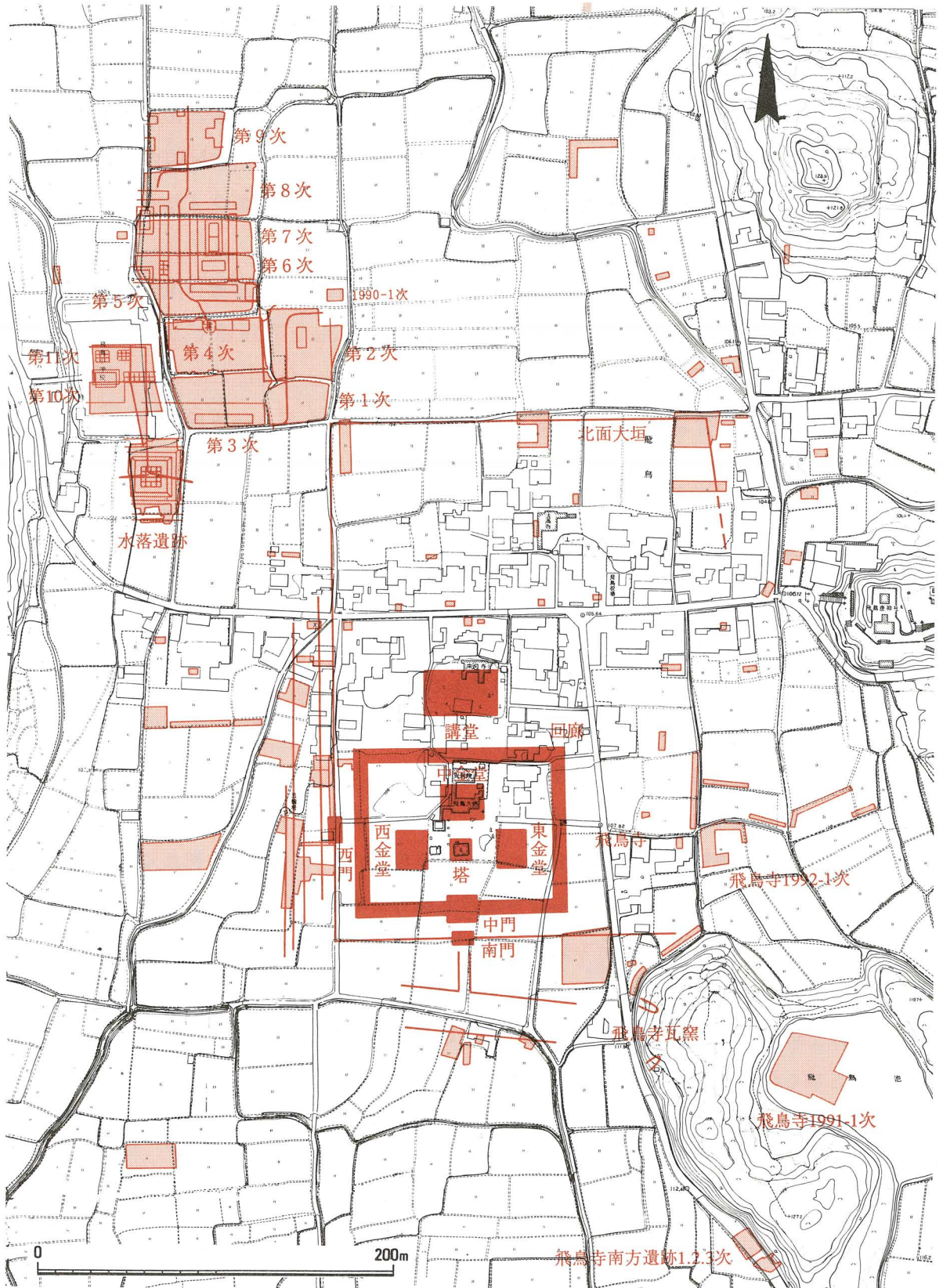


Ⅲ、飛鳥地域の調査



第33図 飛鳥地域調査位置図

1、石神遺跡の調査（第11次）

（平成四年七～十二月）

昭和五十六年に始めた石神遺跡の発掘調査は、途中1年間の空白を除き、今年度で11回目を迎えた。第9次調査までは旧飛鳥小学校の東側で水田を一筆づつ調査してきたが、昨年度の第10次調査から、明日香村教育委員会の協力を得て、旧小学校の敷地を数回に分け調査することになり、今回の第11次調査はその2回目にあたる。

調査地は第4次調査区の西で、1棟だけ残る旧飛鳥小学校校舎と第10次調査区を隔てて水落遺跡の北にあたり、小字名を唐木という。調査面積は新規分が東西34m、南北20mの680㎡で、第10次調査区の北端部分を幅2.5mで再発掘したので、総面積は765㎡となる。第1次調査からの累計は11,800㎡に達し、石神遺跡の規模は南北が160m以上、東西が140m以上に及び、さらに北および西へ広がることが判明している。

遺 構

層序 調査区の基本的な層序は、上から校庭造成に伴う盛土、灰褐色土、含炭褐色土で、その下が黒褐色土ないし黄褐色山土の整地土となる。校庭造成時の削平は西に行くほど著しく、盛土の直下が含炭褐色土となるところも多い。遺構の大部分は整地土上面で検出したが、校舎の基礎工事などの攪乱を受けているところでは、地山を形成する灰褐色砂層ないし暗褐色砂礫土層上面で遺構を検出した。遺構面は全体に東南が高く、西北に緩やかに傾斜しており、A期の石敷面での比高差は0.2mほどである。

時期区分 これまでの調査によって、主として7世紀中頃から8世紀前半にわたる遺構を検出しており、大きくA期からD期の4時期に分けられる。

＜A期（7世紀中頃:斉明朝）＞ 飛鳥寺の寺域の北に東西大垣SA600が作られ、その北側に石神遺跡、南側に水落遺跡が営まれた時期である。石敷の広場や複雑に延びる石組溝、石敷を巡らした井戸、回廊で囲まれた大規模な建物など、多くの遺構が見つかっており、大きく井戸の北の長大な建物で囲まれた外周東

西24.7m、南北49.4mの東区画と、東を長廊状建物SB820、北を東西棟建物SB1330で囲まれた南北88m以上の西区画に分かれ、さらに北方にも特異な形状の建物や倉庫群が存在する。

＜B期（7世紀後半:天武朝）＞ A期の遺構を取り壊し、新たに整地を行い、南北塀によって区切られた空間に総柱建物や南北棟建物を配置した時期である。A期とは全く異なった遺構の状況であり、遺跡の性格が変わったことがうかがえる。

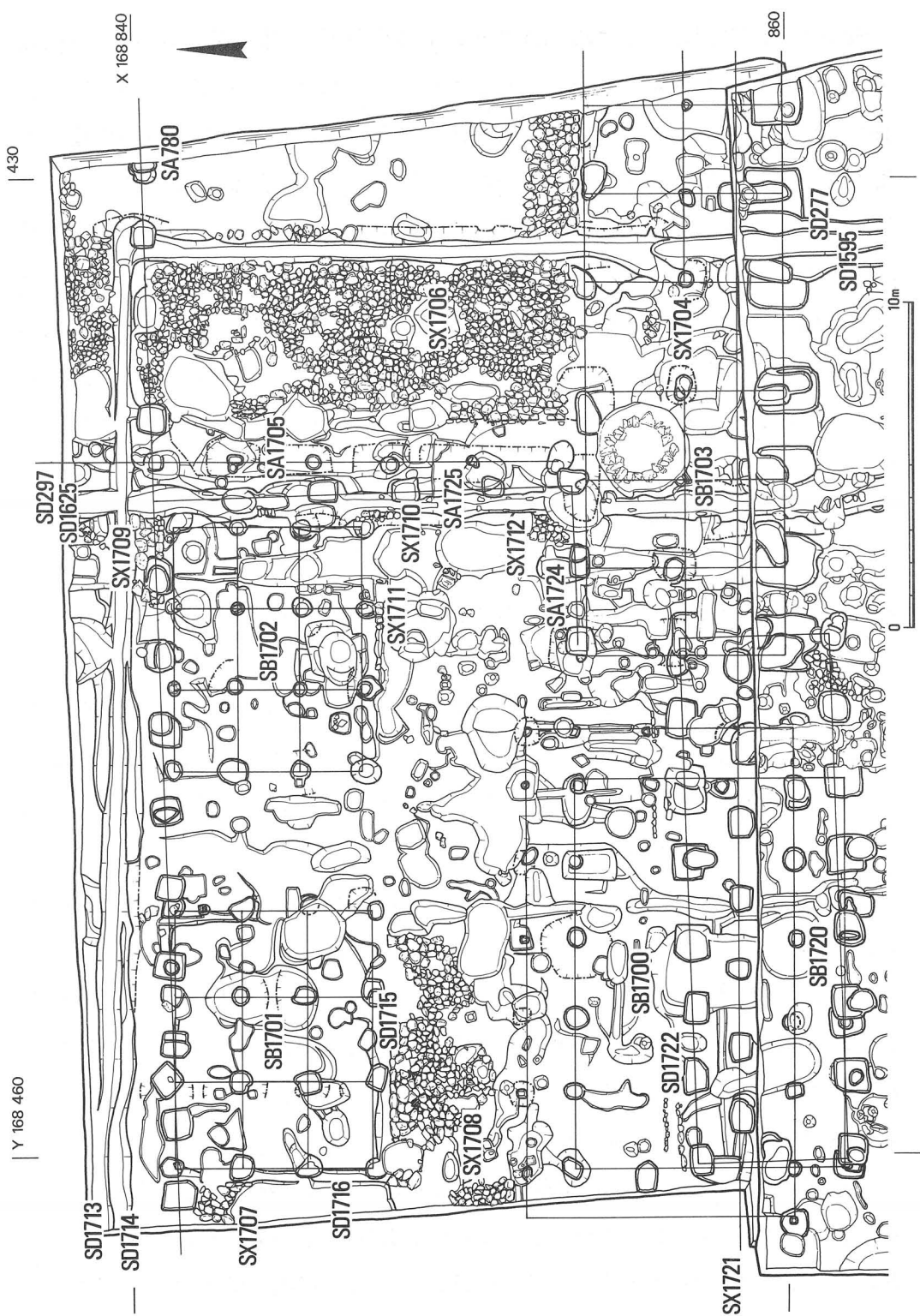
＜C期（7世紀末～8世紀初頭:藤原宮期）＞ B期の遺構がすべて取り壊されて東側に南北道路が通され、その西の掘立柱塀で囲まれた大きな区画の中に小規模な建物・井戸などが点在する時期である。

＜D期（8世紀前半:奈良時代）＞ D期には第9次調査地で検出された小規模な建物や井戸が属し、この時期の遺構はこのあたりから北に存在するようである。

今回はA期およびC期の遺構を検出した。ただし第9次調査の段階まではA期を3小期に細分してきたが、第10次調査と同様今回も時期細分の手がかりに乏しく、西区画においてはA期の遺構はA-3期のものに限られるようである。

A期 掘立柱建物4棟、掘立柱塀1条、溝3条、石敷7面以上がある。この時期の柱穴には著しい特徴がある。まず柱掘形を掘って柱を立て、埋め戻した上に整地土をかぶせ、後にすべての柱を抜き取っている。しかも抜き取りはまっすぐ上向きにおこなっており、その痕跡は円形を呈する場合が多い。したがって整地土の上面では柱抜き取り穴だけが見え、整地土がごく薄いか削平された部分においてのみ掘形の輪郭が検出可能である。抜き取り穴には赤褐色の焼けた壁土の入ることがある。

SB1700は東西5間、南北3間の身舎の四面に庇がめぐる東西棟建物である。ただし南庇の両端の柱を欠くので、入り隅の構造となる。柱間寸法は桁行2.3m、梁間2.2mで、庇の出は1.5mである。柱はすべて抜き取られていた。身舎の柱掘形は隅丸方形で一辺2m、深さ1.7mに達するほどの大型なものであるが、庇の柱掘形は一辺0.7～0.8mと小型で、抜き取り穴も小さい。黄褐色山土の基壇土が一部に残っており、元は低い基壇があったものと思われる。



第34図 石神遺跡第11次調査遺構実測図 (1 : 200)

SB1701・SB1702はともにSB1700の北にある桁行3間、梁間3間の総柱東西棟建物で、北側柱筋を揃え、4.1mの間隔をおいて東西に並ぶ。SB1700との間に幅3.8m強の石敷SX1708があるが、SB1701の部分は石敷面より高く黒褐色の整地土を積んで基壇状に高め、石敷面より0.05mの高さまで遺存する。SB1701の南辺に沿って、SX1708との間に幅0.4mほどの溝SD1715があり、建物西辺へ回って溝SD1716となる。これらの溝は基壇外装地覆石の抜き取り痕跡であろう。柱間寸法はSB1701が東西2.6m×南北2mの等間であるのに対して、SB1702は東西2.5m×南北1.9mの等間で、SB1701の方がわずかに大きい。柱掘形は一部で検出されただけだが、一辺は2m近くあり、SB1700に匹敵する。なおSB1700の身舎西妻柱筋とSB1701の西側柱筋とが揃う。

SB1703はSB1700の東にある長大な総柱東西棟建物で、今回は6間分を検出したにとどまったが、さらに東へ延びると思われる。柱間寸法は梁間が3m等間、桁行は西3間と東2間が2.7mであるのに対し、西から4間目だけが3.3mと広い。この部分SX1704は通路のような施設であった可能性が強い。SX1704を通して北へ抜けると石敷広場SX1706となり、南方には第10次調査で検出した通路SX1620がある。西妻と側柱の柱掘形は一辺2m前後と大きいが、棟通りの柱掘形は1m前後と小型でしかも浅い。SB1703だけは斜め上方に柱を抜き取っている。なおSB1703はSB1700と棟通りを揃えている。

SA1705はSX1706の西縁の見切りとSX1710の東縁の見切り(間隔2.7m)の中央を通る南北塀で、広場と建物群を画する施設と考えられる。柱間寸法は2.5m等間で、5間分を検出したが、さらに北へと延びるものと思われる。柱掘形は南北1.5m、東西1mほどの縦長の平面形を呈し、南端の2個は布掘り風に一括して掘り込まれている。南端はSB1703の北側柱西から2間目の柱穴と重複するが、若干東北にずれており、直接取り付かない。

SD1595・SD297・SD1713は水落遺跡から延びてくる木樋などを抜き取った痕跡で、SD1595・SD1713が木樋E、SD297が木樋Hの抜き取り溝に相当する。南北溝SD1595は調査区北端近くではほぼ直角に西へ折れ東西溝SD1713へと連なる。南北溝SD297はさらに北方へ続いており、ともに水落遺跡の水時計中心部から

70m以上延びてきたことになる。抜き取り溝は上幅0.6～0.7m、底幅0.3mほどで深さは約0.8mあり、北および西へ向かって深くなる。底部には木樋の痕跡は勿論、木樋の固定に使用した粘土あるいは水が流れた形跡は認められない。

これらの抜き取り溝の両側には木樋を埋設した掘形がある。SD277がSD1595、SD1714がSD1713、SD1625がSD297に各々対応する。ともに幅1.7m前後で、断面の観察によると深さは抜き取り溝と同じで、木樋を据え付けたのち版築状に丁寧に埋め戻している。施工の順序としては、まず掘形を掘って木樋を据え付け、埋め戻したのちに整地土を置き、石を敷いている。のちに石敷を壊し、溝をうがって木樋を抜き取ったが、抜き取り溝には焼土が含まれているので、抜き取ったのは周辺の建物が焼けたあとのことである。SD1713とSD297は調査区北端近くで交差する。この部位には柵のような施設があったはずで、一辺1.2mほどの方形に掘形が深くなっていた。なおSB1703とSD277の前後関係については、第10次調査の南側柱の場合、SB1703の柱掘形が先でSD277は後であったが、今回の北側柱では逆転した。それは両者の工事が同時に行われ、部分的に施工手順が前後したためと考えられる。

SX1706はSB1703の北に広がる石敷で、南はSB1703の北柱筋に揃えて見切りとし、部分的にはあるが柱掘形を覆っている。また西も同様にSA1705に対して見切りを設けており、その範囲は東西9.6m以上、南北15.6m以上となり、広場と呼ぶのがふさわしい。

SX1707はSB1701の西北にわずかに残る石敷である。SX1708はSB1700の北とSB1701の南に広がる石敷で、SB1700の北庇、SB1701の南側柱に沿って見切り線が通る。SX1709はSB1702の東北、SX1710は東南にわずかに遺存する石敷で、SX1711はSB1702の南辺に沿う石敷であるが、わずかに数石が残るのみである。SX1712はSB1703の北、SA1705以西に広がる石敷である。

以上の石敷は遺存率がはなはだ悪いが、A期の建物の柱筋に合わせて縁を通してあり、これらはすべて一連のものであったと考えられる。したがって建物の外部はすべて石敷であったことになる。これらは通路としての機能のほかに、雨落ちも兼ねていたであろう。なお地山が砂質であるためか、整地土の薄い箇

所では石敷が陥没していることがあり、石敷面にはかなりの凹凸が認められた。人頭大から一抱えもありそうな自然石の、比較的平坦な面を上にとろえて敷くのであるが、敷き方には一定の法則性があるようである。まず大型で直線的な辺を持つ石を選んで石敷きの範囲を予め囲み、縁の部位に見切りを作る。次に数メートルおきにやや大振りの石で枡形に仕切り、あとは石の形に従ってその間を埋めてゆくのである。

C期 掘立柱建物1棟、掘立柱塀3条などがある。ほかに多数検出した土坑の大半は、出土遺物からみて、当期に属するものと考えられる。

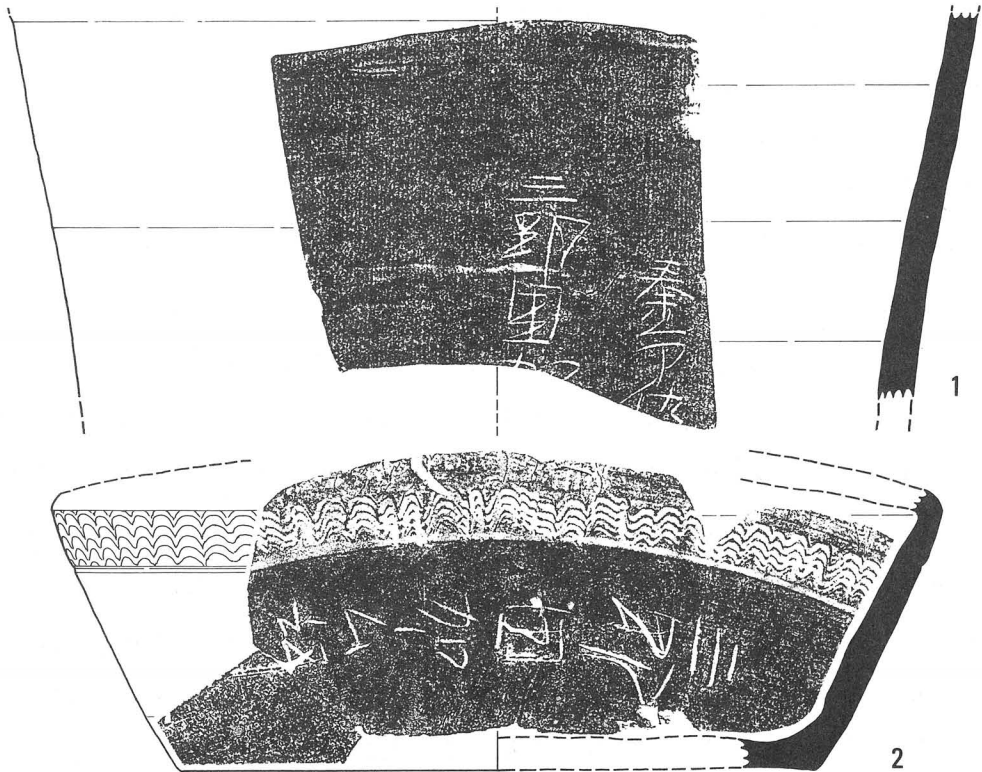
SB1720は東西7間、南北2間の東西棟建物で、柱間寸法は桁行・梁間ともに2.3m等間である。SB1700と重複し、SB1700より新しい。北で西に約2度振れる。柱掘形は一辺1mほどの方形で、柱はすべて抜き取られている。北側に沿って部分的に石組溝SD1722が遺存する。SD1722は北雨落溝と考えられる。なおSB1720の内部には東西に7個の柱穴が並ぶSX1721があるが、柱穴内部の埋土や振れがSB1720とは違っており、性格は不明である。

SA780は調査区北端部を横断する東西塀で、13間分を検出した。柱間寸法には若干のばらつきがあるが、平均2.4mである。SB1720と同じく北で西に約2度振れる。これは第4次調査で検出したC期の区画南限施設である東西塀SA780の西延長線上にあり、一連のものであるとすると、その総延長は25間以上（60m以上）の規模となる。SB1720はこの区画の南外方にあり、別の建物群が存在したことになる。

SA1725はSD297の東沿い、A期のSA1705の西をほぼ並行する南北塀で、4間分を検出した。南端で西へ鍵の手に折れSA1724となる。SA1724は2間を検出しただけである。柱間寸法はともに2.4m等間で、SD297と重複関係があり、SD297より新しい。これらは、当初柱穴の埋土がC期のものと異なるためにB期と見たが、ほかに関連するB期の遺構はなく、SA780から派生してきており、振れがC期の建物・塀と共通するので、C期に属すると考える方が妥当であろう。そうであるとするならば、このSA1724・1725はSB1720の北方に広場的な空間を形成するための施設となる。

出土遺物

土器、瓦、金属製品、石製品、土製品がある。いずれも整理途上にあり、ここでは特徴的なくつかに触れておく。土器には含炭褐色土やC期の土坑等から出土した7世紀代の土師器、須恵器が大量にあり、ほかに平安時代の灰釉陶器などが少量ある。土師器では東国系の黒色土師器杯が注目される。これはこれまで主に第3～8次調査区で多量の飛鳥IV～Vの土器に混じって、完形に近い形で少量出土しており、飛鳥地域でも石神遺跡から特徴的に出土する土器である。須恵器では文字を篋書きしたものが注目される（第35図）。1は直口の大型鉢の体側部に縦位に書かれ、「秦人マ佐□／三野國加□」と判読される。2は平瓶と思われる偏平な壺の体側部に横位に書かれ、「三野國加々ム（牟）評□□」と判読される。これは大宝律令施行以前の国評制下で生産地において書かれたと推定される。また肩部には櫛描き波状文が見られ、この時期の平瓶としては特異である。石神遺跡では第5次調査の「瓮五十戸」をはじめ、幾点か



第35図 刻字土器実測図（1：2）

の篋書き土器が出土しているが、その中には愛知県小牧市篠岡78号窯出土のものと同じ「尾山寸」「山寸」「久」等の文字を刻んだものがあり、土器の特徴は尾北古窯跡群に類似する。今回の篋書き土器も須恵器の年代観や飛鳥地域への供給元を解明する上で貴重な資料である。瓦は軒瓦に角端点珠式の素弁蓮華紋軒丸瓦1点、四重弧紋軒平瓦11点があるだけで、丸・平瓦は極めて少ない。鉄製品には釘、鍵、錐、斧、鎌、刀子、紡錘車等既往の調査出土例と同じ種類のものがある。石製品には砥石、紡錘車、石鏃等があり、ほかに凝灰岩質砂岩の切石、室生安山岩の板石、サヌカイトの剥片等がある。土製品には鞆羽口、土馬、土製円盤、硯等があり、他に赤褐色に焼けた壁土がある。土馬は鞍を突帯と竹管文とで表現し、7世紀代の土馬の特徴をよく示している。硯は獣脚円面硯の脚部で、胎土などから新羅製と目される第4次調査出土例と同一個体である。彼我は約50m離れて出土したことになる。壁土はA期の柱穴などから比較的多量に出土した。スサを多量に混ぜた下地に厚さ0.5～1cmの白土を塗っている。下地層には壁小舞の痕跡と思われる空洞が残るものがある。

まとめ

第10次調査に引続き石神遺跡の西南部を調査した結果、A期の西区画の様相がより具体的に把握出来るようになった。

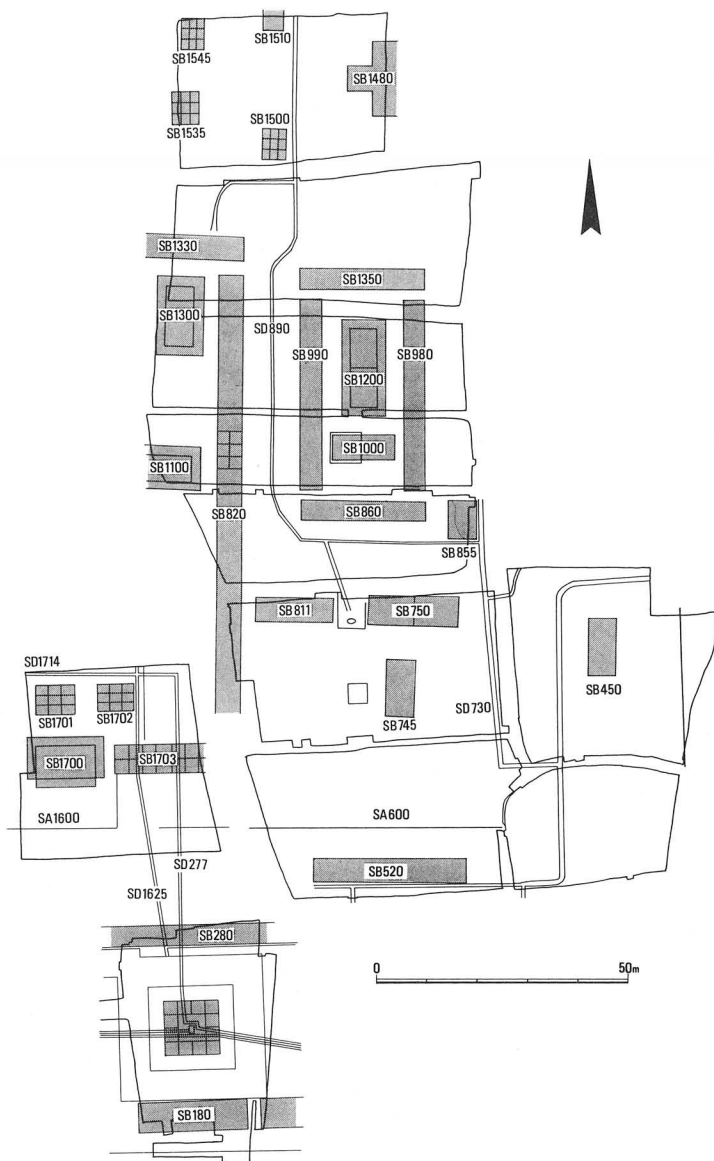
西区画の東を限る長廊状建物SB820の南端部は旧小学校東側の里道の下にあるため、推定の域を出ないが、調査区東南部で検出したSB1703を桁行6間と考えれば、SB820はさらに南に延びて南面を画するSA600に突き当たる。またSB1703の桁行が9間であるとすれば、SB820はSB1703の北で終わって、SB1703が区画の南限を画することになる。後者を採用すると、西区画の南北長は外寸で106m余りになり、これは高麗尺で300尺の完数が得られる。この区画の南限線上に四面庇付きの東西棟が建つことになる。SB820は梁間1間で柱間が5mとなり、北限のSB1330も同様であったが、SB1703の場合は梁間2間で柱間が6mと規模が大きくしかも総柱である。南面を重視した表れであると理解したい。西区画の東西の規模は42m以上で、飛鳥川東岸近くまで広がっていたことになる。

東区画はきわめてコンパクトにまとまった配置をもち、石神遺跡の中でも重

要な役割を果たした施設の一つと推定できる。一方、西区画の内部には、幅9.6m以上の石敷広場の内側をさらに塀で仕切り、建物を密に配置し、そして建物外をすべて石敷とするなど、西区画は東区画より大規模かつ中枢的な施設であった可能性が高くなりつつある、と言えよう。

水落遺跡に発した木樋が石神遺跡の奥深くまで延び、1本はさらに北進し、1本は西へ折れ曲がるのが判明した。水落遺跡と石神遺跡はSA600で隔てられているけれども、別の空間として機能していたのではなく、一体の空間として利用されたのである。これらの水を利用した噴水などの施設は今回も見つからなかった。さらに北あるいは西における今後の調査に期待したい。

C期のSA780は当初からその存在が予想されたが、塀による区画のさらに南方にもC期としては規模の大きいSB1720が見つかり、藤原宮期まで当地が総体として利用され続けたこともほぼ確かになった。



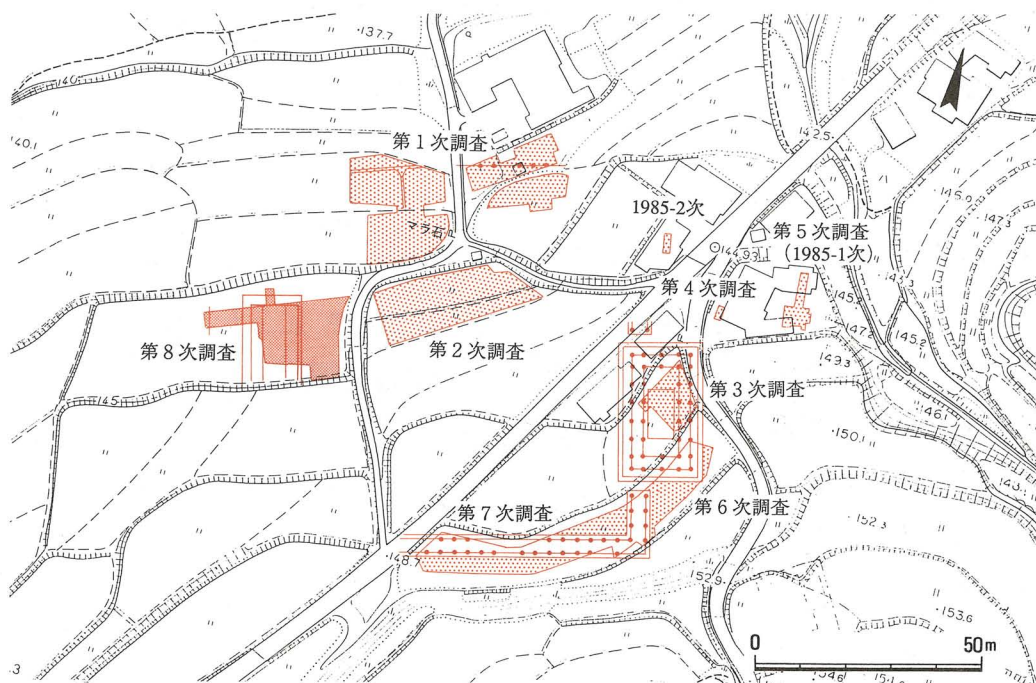
第36図 石神遺跡A期主要遺構配置図(1:1500)

2、坂田寺の調査（第8次）

（平成四年四～七月）

この調査は、マラ石の西南20m、奈良時代の坂田寺の西面回廊が想定される南北里道に西接した水田における家屋新築に伴う事前調査である。調査地を含めた里道西の3枚の水田は、奈良時代の伽藍と同じ方位をもって東西60m以上にわたって広がっており、関連遺構の存在する可能性があることから、調査は、当初敷地の東端に幅6～7m、長さ17mの南北トレンチと、敷地の北端に幅4mで敷地の西端まで長さ32mの東西トレンチとをL字形に設定して、西面回廊関連遺構の検出と寺域の広がりの確認とを目的として実施した。その後、検出された基壇建物の中央部と北端とを確認する目的で、それぞれ10m四方と1×2mの拡張区を設けた結果、調査面積は330㎡となった。

調査地の基本層序は、上から耕土、床土、茶灰色砂質土で、調査区の中央部ではその下で建物の基壇土である褐色土が検出され、その東と西には暗灰色粘質土、黒灰色砂質土の厚い堆積層が認められ、西端はさらに深くなって黒灰色



第37図 坂田寺調査位置図

粘土が堆積する。建物の東側では瓦を含む黄灰色砂質土、黄灰色粘土の整地土、灰褐色砂質土が認められ、それらは北で厚くなる傾向にあっていずれもが周辺地の造成に関わる土層と考えられた。なお一部で瓦を含む整地土を除去して下層遺構を検出した。

遺構

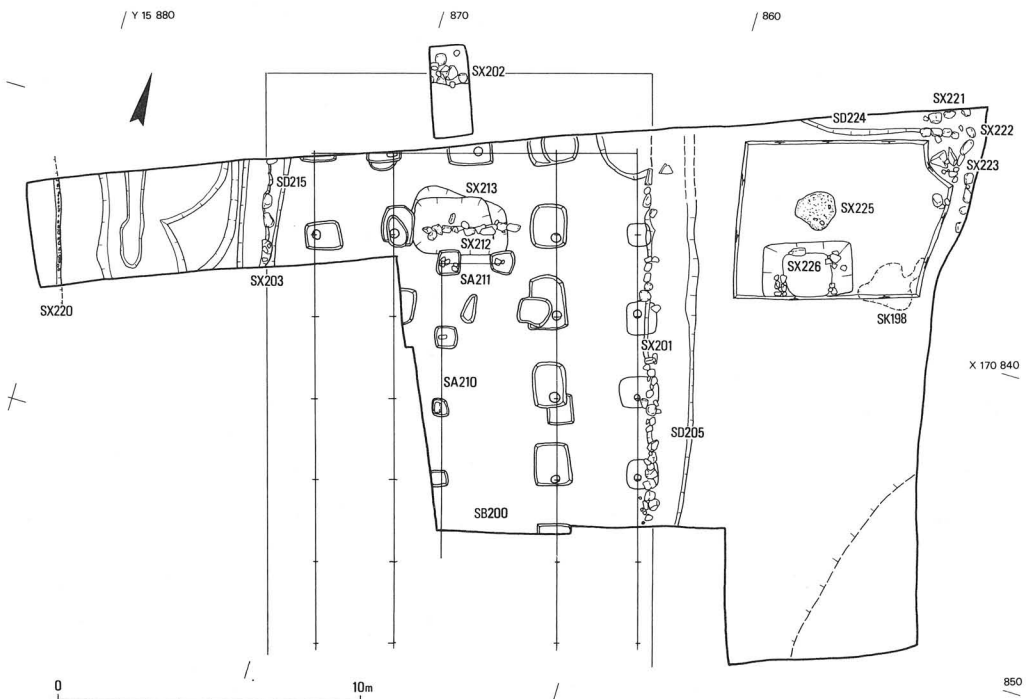
検出した遺構には西面回廊の基礎地業にかかわる石列、基壇を持った掘立柱建物とその雨落溝、小石で築いた石列などがあり、整地土下の下層遺構に炉跡や土坑がある。

掘立柱建物SB200は調査区の中央で検出した南北棟建物で、梁間2間の身舎の東西に庇が付き、桁行は6間以上の規模である。柱間寸法は桁行梁間ともに2.7m（9尺）等間で、庇についても同様である。身舎の柱掘形は桁行方向に長い傾向にあり、1.1×1.5mの長方形で深さは約1.2mである。いずれの柱掘形にも直径20cmほどの柱痕跡があり、その内の一本には底に柱根が遺存する。柱は柱掘形の中央ではなく一方に偏する傾向にあり、柱の下に石塊を詰めたものがある。庇の柱穴は身舎の柱穴よりもやや小さく、掘形の規模は一辺0.9×1.0m、深さ0.6mで、柱痕跡は直径15cmほどと細い。

SB200は縁石を巡らせた基壇をもつ。縁石は調査区の都合で、西辺の北半と北辺の一部および東辺とを確認したにとどまるが、直径30～40cm大の自然石を並べたもので、北半にのこる最下段の石は南北方向に長く配置されているのに対して、東辺の南半は乱雑に崩れた部分が多く、その基底部を確定し難い。北半の縁石基底部で測った場合の基壇の東西規模は12.8mほどとなる。東辺では縁石の下底部は南に高く北に低くなっていて、その差は0.2mほどある。さらに東辺と西辺とでは、西辺が0.5mほど低い位置にあって、見かけの基壇高は一定しないことになる。基壇検出面の高さは南で高く北に低く、その差は0.4mほどである。基壇上面が水平であった場合、基壇高は西北部では1.1mで、東南部では0.4mと推定され、基壇縁の構造は一様ではなかったであろう。基壇の北端は、調査対象敷地外を土地所有者の了解を得て一部調査した結果、北妻柱の北2.7m（9尺）の位置で検出された。縁石は0.4m大の石で一段遺存し、その下

底部は西辺の縁石と同高にある。縁石外には暗灰褐色粘土が堆積し、大型石塊や瓦、磚が出土した。建物から基壇縁石までの距離は東では0.6m（2尺）、西では1.5m（5尺）ほどあり、東・西辺で異なっている。このことは見かけの基壇高が東よりも西で高いと推定されることとともに、この建物の意匠や正面観の問題と関わる重要な課題であるが、後考をまちたい。なお東庇の柱掘形は基壇縁石の下で検出され、縁石の外装は建物を建てた後に行なわれている。

基壇内では北から一間目の身舎梁間間に石列SX212、土坑SX213が検出された。SX213は東西2.9m、南北1.8m、深さ0.5mで、下層に純粋な木炭細粒層が堆積する。木炭細粒層は南で厚く15cmほどあり、北では2cmと薄くなるうえに、南端が基壇検出面で検出されるのに対して、北端は基壇を構成する土層の間に入り込んでいて、南端と同一面では検出されない。石列SX212はSX213の木炭細粒層の上を覆う黄色粘土層中にあり、30cm大の塊状あるいは扁平な石を2～3段積み上げている。石列は建物SB200の柱筋と同じ方向にいくぶん北によった位置に並んでおり、東西長は3.5mである。列の中央部がやや低くなっていて上



第38図 坂田寺第8次調査遺構実測図（1：250）

端は必ずしも平坦には揃っていない。土坑・石列は想定される基壇土の高さからすれば、最も高い石列の石が0.3mほど下にあって、基壇土中に封じ込められていたと考えられる。SX212・213は建物の柱筋と揃う位置にあり、構築物と考えられるが、その性格は明かにし得なかった。調査区北端の土層観察によれば、基壇形成土には他にも純粋な灰色砂や炭化物層が塊や層をなしている部分があり、それらには7世紀前半代の土器が含まれている。基壇全体の築成は北と西に分厚くなされていて、同一面でみた場合、積土層の違いが南北方向に認められる。これは基壇の造成がそれ以前の傾斜地を埋めるようになされた結果であり、土坑状の落ち込みSX213とその上に東西に並ぶ石列SX212も他の炭化物層と同様に、基壇築成時に形成されたものと思われる。

基壇内の施設には他に、南北柱列SA210と東西柱列SA211とがある。柱穴は一辺0.8mの方形で、深さ0.4mある。SA211の2個の柱穴のみが黄色山土と炭の混じった土で埋められ、他は灰褐色粘土で埋められる。柱穴底に20～30cm大の石が遺存するものがあり、柱をうける礎盤と考えられる。石の上面の高さは推定基壇面下0.4mにある。SA210はSB200の身舎梁間の1/3の位置にあり、柱間は2.4m等間である。北端から4本目の穴が、SB200の北から5本目の穴と柱筋が揃っている。東西柱列SA211は2本で構成され、SB200の身舎梁間を3等分する位置に配置されている。SA211の柱はいずれもSX213の南辺を削っていて、それよりも新しい。柱筋がそろふこと、身舎の内に限定されることから、建物と深い関わりがあり、柱間が異なることから、床束の一部である可能性があろう。

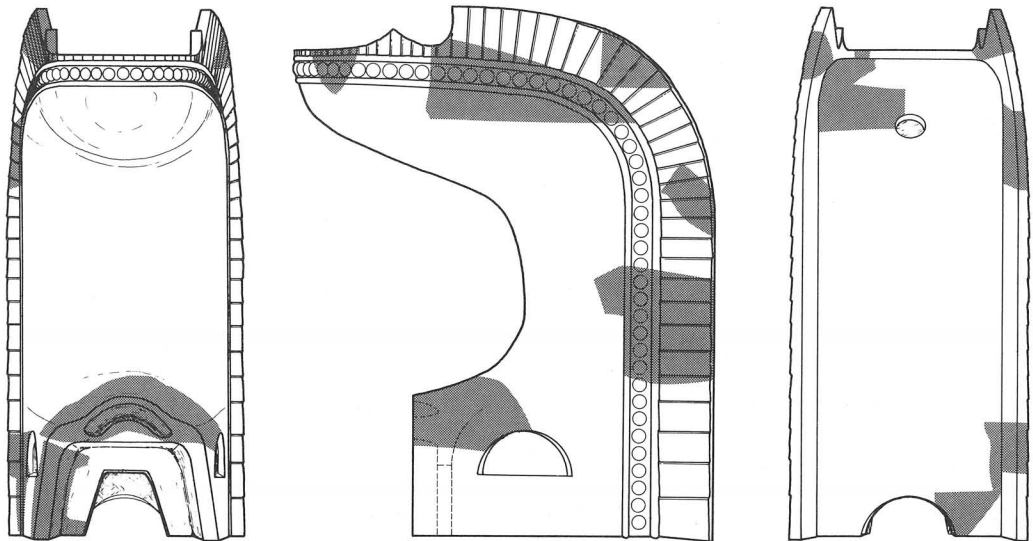
基壇縁石の外側には浅い素掘り溝SD205・215がある。東のSD205は幅1～1.5mで南が幅狭く、深さは0.3mである。埋土は黒灰色砂質土で金属製品、土器、瓦片が含まれる。西のSD215は3.5m分を確認したにすぎないが、幅0.9m、深さ0.2mほどで暗灰色粘土が堆積する。埋土からは鉄製品・土器片が出土した。

基壇の西外方は北へゆるやかに下降する平坦面が広がるが、縁石の西6.9mには南北方向の小石列SX220がある。小石列の西側は段をなして0.35m低くなっており、そこには瓦や土器を含む暗灰色粘土が堆積する。小石列は15cm大の石を立て並べて粘土で裏込めしたもので、幅0.9m以上の溝の東壁である可能性

があるが、調査区内では西岸は検出されなかった。

基壇の東外方には瓦片、鷓尾片を多量に含む黄灰色粘土の整地土層がある。整地土上面は基壇縁石下端と同じ高さであり南で徐々に高くなるが、整地土も南で薄くなり、調査区の南端付近では灰色粘質土が現われる。整地土の上面には、1.7×1.3mの不整円形で深さ5cmほどのくぼみ状の土坑SK198がある。土坑からは平城Ⅳの時期の土師器・須恵器が面をなして出土し、この土坑の検出面が生活面であった時期のあることを思わせる。

整地土の東端には、石列SX221・222・223があり、瓦層は石列SX223の下に潜り込んでいる。石列SX221・222は東西方向の石列で、1.8m分を検出した。その西は素掘り溝SD224となり西方へ延びている。石列の並びは乱雑であるが、2条の石列間に素掘り溝の堆積土と同様の土が延びて行くことから、この2条の石列は石組暗渠の側石を構成するものと思われる。石列の東端は後世に破壊されて明らかでないが、調査区の東壁には黄褐色粘土や黄灰色砂質土からなる積土層が見られ、それに向かって延びているようである。黄褐色粘土の積土層の中にある南北方向の石列SX223は、東壁にかかる形で検出したために、その規模・構造とも明確でないものの、西に面を揃えて南北方向に配置され、背面の積土層が第2次調査で確認した段状の盛土に類似することから、その基底部す



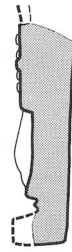
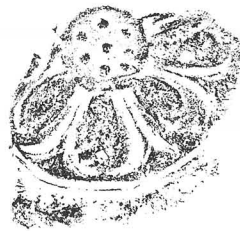
第39図 坂田寺出土鷓尾復原図(1:4)

なわち西面回廊の基礎地業の一部であると考えられる。

整地土層の黄灰粘土層は30cm以上の厚みをもつが、一部でそれを除去したところ、下面の灰褐色砂質土層上面で、下層遺構である土坑SX226と炉址SX225が検出された。SX226は東西3m、南北1.8mの長方形、深さは0.6mである。検出面では短辺と同方向に並ぶ石列が認められ、北辺にも大型の石が確認され、その内部は粘土層で埋められていた。粘土層中には大型の石塊が投棄されており、粘土層がそれら石組の抜き取り穴にあたるものと考えられた。破壊が著しく明らかでない点も多いが、長方形掘形の内側に石を積み上げ、内部に貯水する構造であったと思われる。炉址SX225は、土坑SX226の検出面と同一面に広がる炭化物層として検出された。炭化物は直径約1.1mの不整形円形に広がり、小石が直線的に並ぶようであるが、下面などに焼けた面は認められない。

遺物

瓦類、土器類、金属製品などがあるが、瓦の他は少量である。軒瓦は飛鳥時代初めから平安時代のものがあるが、7世紀末以降のものはほとんどない。大半は既出の



第40図 軒丸瓦6C型式(1:4)

資料と同内容であるが、坂田寺式重弁の軒丸瓦6型式(『概報』22)に新種があるので6Cとして報告する(第40図)。弁が短く、低い中房と中房蓮子の配置が1+7である点でAやBと異なっている。

また整地土の黄灰色粘土などから鷗尾の断片が多量に出第41図 文字埴(1:4)
土した。鷗尾はこれまでに坂田寺Bとして報告されたもの(『日本古代の鷗尾』飛鳥資料館)と同型式であるが、ほぼ全形を復原しうる各部の資料を得たので復原図を示す(第39図)。なお基壇北端埋土から出土した埴の中に、「西廿六」とへら書きしたものがある(第41図)。土器は7世紀前半代から12世紀後半までのものがある。種類には土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、三彩陶器、緑釉陶器、灰釉陶器などがあり、土師器には灯明皿に使用されたものや墨書の残るものがある。墨書土器は底部外面に、坂田寺の法号「金剛寺」の省略と思われる

「金」一字を大書したものの3点で、いずれも平城宮Ⅳの土師器杯Aである。三彩陶器は薄い板状の破片で八弁の花文を線描きと彩色とで表現する。陶枕の断片であろう。土製品には鞆羽口、土馬、土製小仏像がある。土製小仏像（裏表紙）は頭部の断片で、基壇東の包含層から出土した。胎土等は第7次調査出土例（『概報』22）と酷似するが、宝冠の形状が異なっている。金属製品には銅釘、線彫りのある金銅板、小金銅仏の光背支柱、鉄釘、鉄板などがある。光背支柱は直径0.8～1.2cmの円棒で、外表に竹の節の表現がみられ、上方で湾曲する長さ15cmの断片である。そのほか石製品に比較的多量の凝灰岩質砂岩の切石や室生安山岩の板石などがある。

まとめ

今回の調査成果は、西面回廊の外側に基壇をもつ

た掘立柱建物が発見されたことにある。回廊西側の伽藍と同方向の水田地割の中に、それらと同一方向に営まれた建物や石列などの遺構を検出したことは、この地割が奈良時代の坂田寺の寺域と関わりとの想定をより確実なものにした点で大きな意義がある。以下では今回の成果がかかえる問題点に触れ、まとめとする。

まず建物の造営廃絶の年代について。調査では造営年代を明確に示す遺物、遺構は検出されなかった。しかし周辺の状態から推測すると、建物の基壇土中に7世紀前半の土器や7世紀代と思われる瓦片が含まれ、建物周囲には7世紀後半代までの瓦を使った整地土層が広がっていることから、建物の造営年代を8世紀以後とすることができる。整地土の瓦が8世紀の造営になるとされる段の基礎地業の下に潜ることも傍証となろう。また整地土上の土坑SK198等に8世紀後半の平城宮Ⅳの土器が比較的良好な状況で含まれていたことから、存続年代の一端をその時期におくことができ、東西の雨落溝に9世紀から10世紀代の

軒 丸 瓦	1A	3
	3A	1
	4A	1
	6A	10
	6B	1
	6C	1
	7A	1
	8A	4
	11A	1
	21A	26
瓦	21B	3
	32A	1
小計		53 (60)
軒 平 瓦	101A	1
	104A	1
小計		2
軒瓦合計		55 (62)
道 具 瓦	榿先	2
	熨斗	2
	面戸	2
	鷗尾	2種4個体
	線刻丸瓦	1
	刻印丸瓦	2
	線刻平瓦	1
	刻印平瓦 塼	2 6

第4表 坂田寺第8次調査出土瓦点数
○内は型式不明・種不明を含む

土器が含まれ、それらを覆うように堆積した黒灰色粘質土には10世紀前半代から12世紀後半代の土器が含まれている。建物の廃絶が、第6・7次調査で判明した回廊の廃絶年代とほぼ一致するものと考えられる。

なお第3次調査で検出した仏堂は、須弥壇の鎮壇具の構成から西暦865年以後の造営と考えられており、それに取り付く回廊は少し遅れながらも同時期の造営とされている。しかし第1次調査で検出された石組溝からは「金」「知識」などの墨書のある平城宮Ⅱ～Ⅲ（8世紀前半代）の土師器が出土し、第6次調査で検出した回廊東雨落溝からは灯明の痕跡の見られる8世紀前半代の土師器が出土していて、この時期に寺院として活動していたことは明らかである。今回検出した掘立柱建物は8世紀前半代以後に造営されたと想定され、この時期の坂田寺の遺構である可能性をもっているが、明証に欠ける。

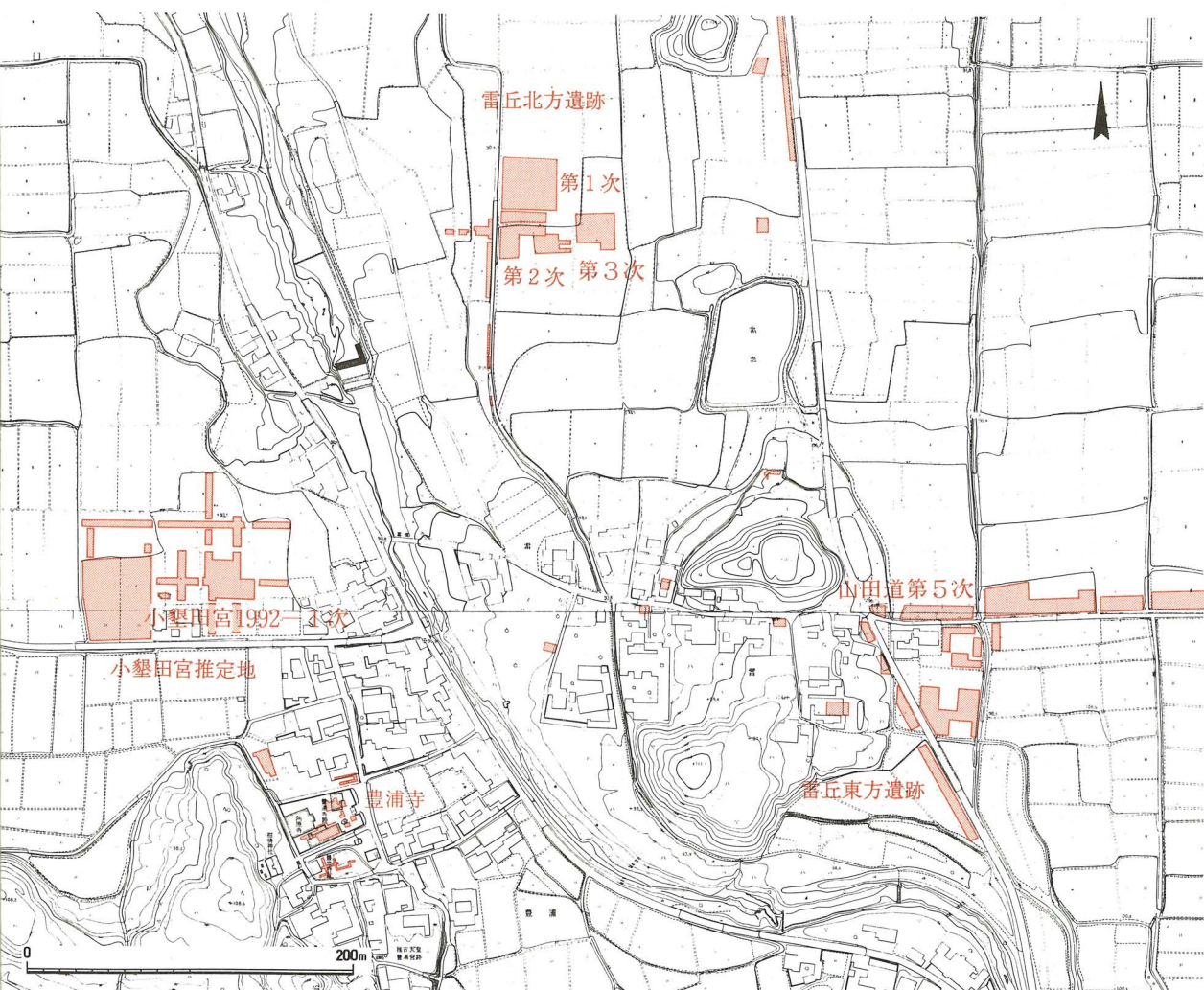
次に掘立柱建物の占める位置について。掘立柱建物の基壇の東縁は西面回廊の基礎地業と考えられる石列SX223の西10.4mにあり、また基壇の北縁は第2次調査で検出し、北面回廊の基礎と考えられている石垣SX120と揃う位置にある。建物の南北長は明らかでないが、仮に6間とした場合、南端は回廊の南北中軸線の北8mほどに位置することになる。一方、柱列SX210と建物の柱筋との関係から南北長を8間と仮定した場合には、3mほどしか余地がなく、西面回廊の南北幅の前面を塞ぐ位置に建つことになる。今回検出した掘立柱建物は、基壇の中央ではなく、東辺に寄って建てられ、基壇の周囲は東側が西側よりも0.3mほど高く造成されている。このことは、建物の正面が西であることを示すと理解されよう。奈良時代の坂田寺は第3次調査の仏堂が西を正面として建てられていることから、伽藍の正面は西であると考えられ、西面回廊の中央に中門が想定されている。今回の掘立柱建物は中門と南門との間に位置することになり、伽藍の構成を他の平地の寺院と同様に考えることができないことになる。この周辺の利用状況が奈良時代の坂田寺の寺域の広がりや伽藍の構成を考える上で重要な位置を占めることを改めて認識させるものである。

なおこの地域は市街化区域に指定されており、今後も宅地化が進むことが予想される。坂田寺の寺域や伽藍の範囲の速急な確認が望まれる。

3、山田道の調査（第5次）

（平成四年八～九月）

この調査は、県道樞原神宮東口停車場飛鳥線拡幅工事に伴う事前調査である。現県道は古道山田道を踏襲し、藤原京京極にもあたると推定されていることから、平成二年度以来継続して調査を行っており、今回はその第5次にあたる。調査地は明日香村雷で、県道の北側、百貫川から雷丘の交差点までの65mほどが調査対象地である。調査は、南北10m、東西40mの調査区（東区）とその西



第42図 山田道・小墾田宮推定地調査位置図

方に10mほど離れて小規模な調査区（西区）を設けて行った。

遺構

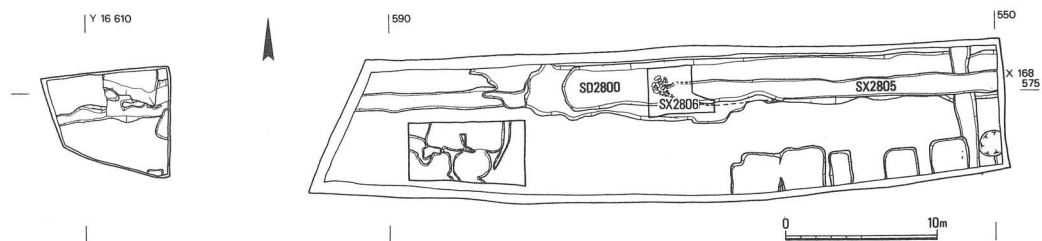
東区では0.5～0.9mの盛土下に旧水田面があり、それから下へ順に耕土、床土、暗茶褐色粘質土、灰褐色粘質土（地山）となる。遺構検出は灰褐色粘質土上面で行った。調査区中央部の東西10mの部分は西北方向の谷筋となっており、7世紀後半に山土を入れ整地している。その厚さは深い所で2mを越える。

西区も東区と同様0.5～0.8mの盛土があり、その下が耕土、床土、淡黄褐色粘質土、茶褐色粘質土（地山）となり、茶褐色粘質土上面で遺構検出を行った。遺構検出面は東区より0.6～0.8m高い。

検出した主要な遺構は7世紀代の東西溝、東西溝状の遺構で、その他に土坑群がある。

東西溝SD2800は幅3m、深さ0.5mの素掘りの溝で、調査区東端から32mほどで西端となる。堆積土は砂質土で、最上層は灰色粘土で埋められている。堆積土からは藤原宮期を中心とする土器類が出土した。また最上層からは奈良時代の軒平瓦(6691F)が出土している。

東西溝状遺構SX2805はSD2800の南半にそれとほぼ重複する位置にあり、SD2800の底部で検出した。幅1.3～1.4m、深さ0.9mで、壁面は垂直に掘られ、埋土は均一の粘質土で、水の流れた形跡は認められない。また埋土上面で柱穴などは検出されなかった。西端は調査区東端から22m、調査区中央部の谷地形の中心付近で確認した。谷部分は黄褐色山土で埋めたてられているが、溝状遺構もこの部分では東側と異なり、山土で埋められている。西端部底面の高さは東端より0.9m低い。西端部のすぐ西側には東西1m、南北1.5mほどの範囲で河原石



第43図 山田道第5次調査遺構実測図（1：500）

の集まる部分SX2806がある。SX2805およびSX2806の時期は埋土から遺物が出土しないために不詳だが、西端部の埋土である黄褐色山土から出土した土器からみて、7世紀後半以前と思われる。

調査区東半南辺部および西端10m部分で多くの土坑を検出した。東側の土坑はほぼ方形で、大きいものは一辺3mをこえ、深さは0.6～0.7mで、埋土に砂の入るものが多い。壁面は垂直あるいはえぐり込まれている。西側の土坑は不整形のものが多く、重複が著しい。調査区西端部はほぼ全面が土坑群で覆われる状況である。地山面が灰白色・灰褐色粘土であることから、粘土採取の穴である可能性がある。出土遺物は少なく、時期は不詳である。また西区の東北部分でL字状の落ち込みを検出したが、壁面が垂直にたちあがる状況や埋土の様子から、東区と同様の土坑の可能性が強い。

まとめ

今回の調査によって、雷丘のすぐ東側における土地利用の一端が明らかとなった。第2・3次調査では幅2.5mの藤原宮期の東西溝SD2540を検出し、これを北側溝とする東西道路SF2607の存在が想定された（『概報』21）。今回検出したSD2800は、西でやや南に振れる方位をもつことからすると、SD2540の西延長線上にあたる可能性があり、また時期的にもSD2540と一致する。

SD2800底面で検出したSX2805は、7世紀後半以前の遺構である。谷筋にその西端があり、底面の高さも西が極めて低いことから、西北方向に向く谷への排水用の溝とも考えられる。しかし垂直に掘り下げた壁面や埋土の状況などから溝とは考えにくい点もあり、その性格については不明である。

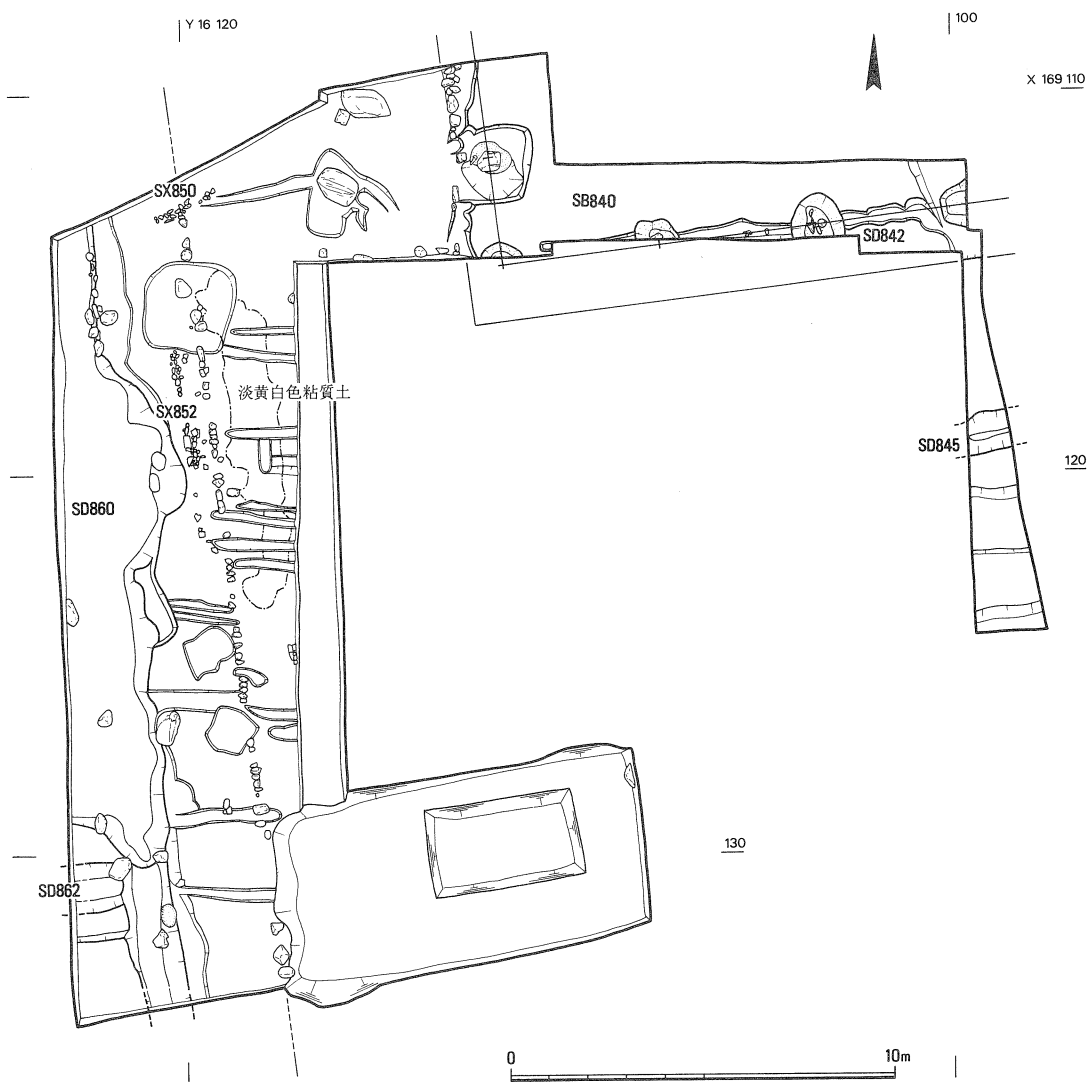
調査区中央部を中心として7世紀後半に整地の行われたことが明らかとなった。時期的にみて、南接する雷丘東方遺跡の造営と関連するものであろうか。

これまで第1次から第5次にわたって古道山田道を探る調査を行ってきた。調査区設定の制約などから、残念ながら藤原宮期を遡る時期の遺構の存在についてはなお不明であるが、東西溝SD2800の検出により、少なくとも藤原宮期には雷丘の裾部までこの溝を側溝とする東西道路がのびていた可能性が強くなった。今後周辺の調査によって藤原京京極の状況を解明することが必要である。

4、飛鳥寺の調査（1992－1次）

（平成四年七～九月）

この調査は住宅建設に伴う事前調査として、高市郡明日香村大字飛鳥で行ったものである。調査地は飛鳥寺の塔の真東にあたり、伽藍中軸線から140mほど隔てた水田である。諸般の事情により調査区の設定にはかなりの制約を受け、複雑かつ狭隘とならざるを得なかった。調査面積は270㎡である。



第44図 飛鳥寺1992－1次調査遺構実測図（1：200）

寺域と周辺調査 これまでの数次にわたる調査によって飛鳥寺の寺域は東限を残してほぼ確定したといえる。まず昭和三十一～三十三年の当研究所による調査で、中心伽藍とともに南門とその南に広がる石敷広場および西門が確認され、寺域の南限と西限が判明した。これによって寺域は2町四方、また中心伽藍中軸線はその西3分の1に偏っていることなどが推定されるに至った（『飛鳥寺発掘調査報告』）。しかし安居院の北方220mの地点で行われた昭和五十二年の調査において東西塀SA500とそれに平行する外濠SD501、内濠SD503などが検出され、実際にはこれらが飛鳥寺の北を画する施設であったと判明し、寺域が従来の推定より北へ1町広がり、南北3町であることが明かとなった（『概報』8）。次いでそこから東へ100mほどの地点で行われた昭和五十七年の調査では、SA500、SD503が南に曲折して南北塀SA600と南北溝SD601へ連なることが明らかとなり、これらが東限を画する施設であると考えられるに至った（『概報』13）。SA600は北で西に約8度振れ、SA500と直角には交わらない。寺域の西北隅想定位置からその交点までは213mあり、これは南北324m（3町）のほぼ三分の二（2町）になるが、南で東に開くことを考慮すると南端では東西2町以上となる。ただし東限については調査が北端部のみで行われており、このまま南へどれだけ延びるか明らかでない。

昭和五十七年の調査成果にしたがってSA600を延長した場合、今回の調査地のやや東を寺域の東限線が通ることになり、調査地全域が寺域の内部となる。しかし伽藍中軸線から西限までが70mで、東限までがその倍であると仮定した場合には、調査区内を東限線が通ることになるので、寺域の東限を画する施設が検出される可能性があった。また調査地の北部が西門の対称位置にあたり、東門の存在も予想された。

また昭和五十九年には今回の調査地のすぐ東側を通る農道の改修工事に伴って調査が行われ、7世紀前半代と考えられる瓦を多量に含んだ炭・焼土層とそれを切り込む礎石落とし込み穴を確認しており、この付近に礎石建ち建物が存在した可能性を示唆した。

遺構 調査区の層序は東と西でやや趣を異にする。東では上から順に耕土、床

土、灰褐色粘質土、黄灰色砂質土、赤褐色土（焼土層）、暗灰色粘質土、炭化物層、青灰色粘土となるのに対して、西では耕土、床土、黄褐色粘質土、灰褐色砂質土、暗灰褐色粘質土である。それぞれ赤褐色土と暗灰褐色粘質土の上面で遺構検出を行った。

検出した主な遺構は礎石建ち基壇建物1棟、石列1条、南北溝1条、東西溝2条である。また南辺では下層の調査を行い、暗灰褐色粘質土から下の層序は上から粘土混青灰色砂質土、暗灰色粘土、暗灰色砂質土、暗茶色腐食土の順で、その下の青灰色砂に至り無遺物層となることを確認した。

SB840は調査区北辺で検出した礎石建ち基壇建物で、北で西に8度の振れをもつ。基壇は0.5mの高さで、旧地表面から0.11mの深さまで掘り下げたのち、15層前後に及ぶ版築を行って築成されている。版築土には建物の周囲に広がる焼土も用いられている。基壇の西面には石積みによる外装が残るが、南面の遺存状況は悪く、断割り調査によって掘り込み地業のみを確認した。調査区の制約から東・北両面を確認できなかったため基壇の規模は不明である。基壇上には東西3間、南北1間の礎石抜き取り穴を確認した。南北については少なくとも更に北に1間延びることは間違いない。全ての礎石抜き取り穴の壁面には風化した花崗岩が貼り付いていた。柱間寸法は東西が4.05m（13.5尺）等間で、南北は1間分を確認しただけであるが、柱間が等間であると仮定した場合2.85m（9.5尺）と考えるのが最も妥当と思われる。しかし南の1間が庇であった可能性も残されており、庇部分が9尺、2間目の身舎部分が10尺以上と考えることもできる。いずれにせよ今回の調査成果だけで規模・構造等を推定することは困難である。基壇上面では東西の礎石抜き取り穴の間をつなぐ浅い溝SD842を検出した。溝中には多くの凝灰質砂岩小片が含まれており、地覆石の抜き取り溝であった可能性が強い。なお礎石据付け掘形内からは7世紀後半の土器が出土している。

SX850はSB840西妻柱筋から西に8.1m（27尺）を隔ててある南北方向の石列である。土坑・溝等によって一部を欠くが、調査区の南から北まで20mに及んで確認した。SB840と同じく北で西に8度振れる。石列より東に淡黄白色粘質土

層が一部帯状に残っており、淡黄白色粘質土は築地塀積土の一部で石列が築地西側の基底石であったと考えることもできようが、石の面は西に揃っているとはいえず、東側に同様の石列、またはその抜き取り穴を確認することが出来ず、やや疑問が残る。むしろ現段階では、昭和六十年の西門（K地点）の調査の際に検出した石列と同様（『概報』15）、建物から溝に至るまでを犬走り状に整地したその見切りの石と考えた方がよいであろう。また石列の西0.7mに瓦列SX852が並行してあるが、わずかに遺存するだけで、両者の間が溝状をなしておらず、石列に伴う施設とは言い難い。

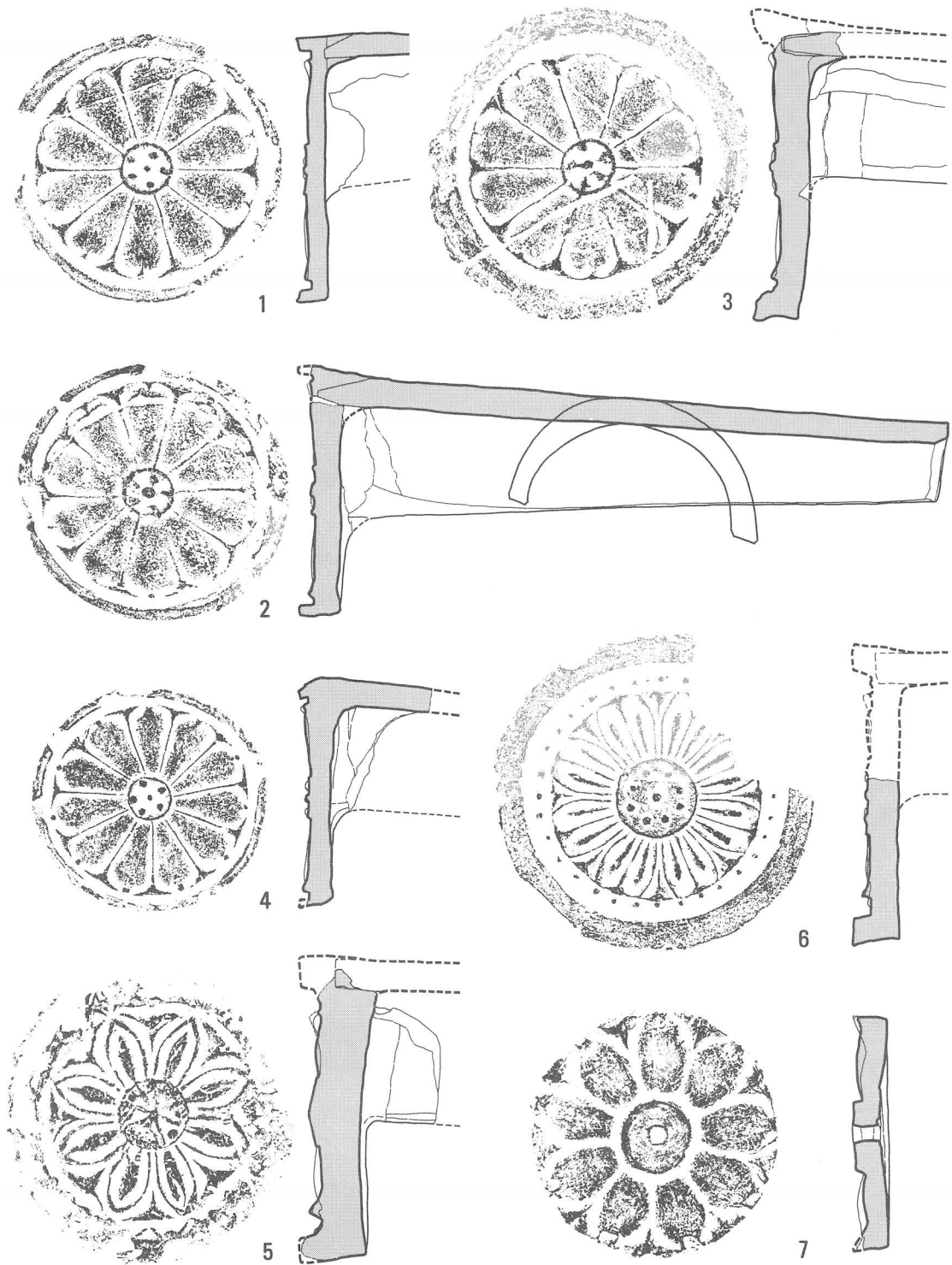
南北溝SD860はSX850の西に2.7m（9尺）を隔てて並行する溝である。調査区北端では溝の東岸に石組の護岸が一部残り、当初石組溝であったことがわかる。石組護岸の上端はSX850から0.2mほど低い。溝幅は調査区南端で確認でき、1.2mで、深さ0.6mを測る。溝の埋土からは土師器の灯明皿、黒色土器など10世紀後半の土器が出土し、この頃まで機能していたことがわかる。

東西溝SD862はSD860と連なる幅1.3m、深さ0.25mの溝である。一部分だけを確認したにとどまり、SD860と合流する溝か分岐する溝か、また素掘り溝か石組溝かなどは明らかにし得なかった。

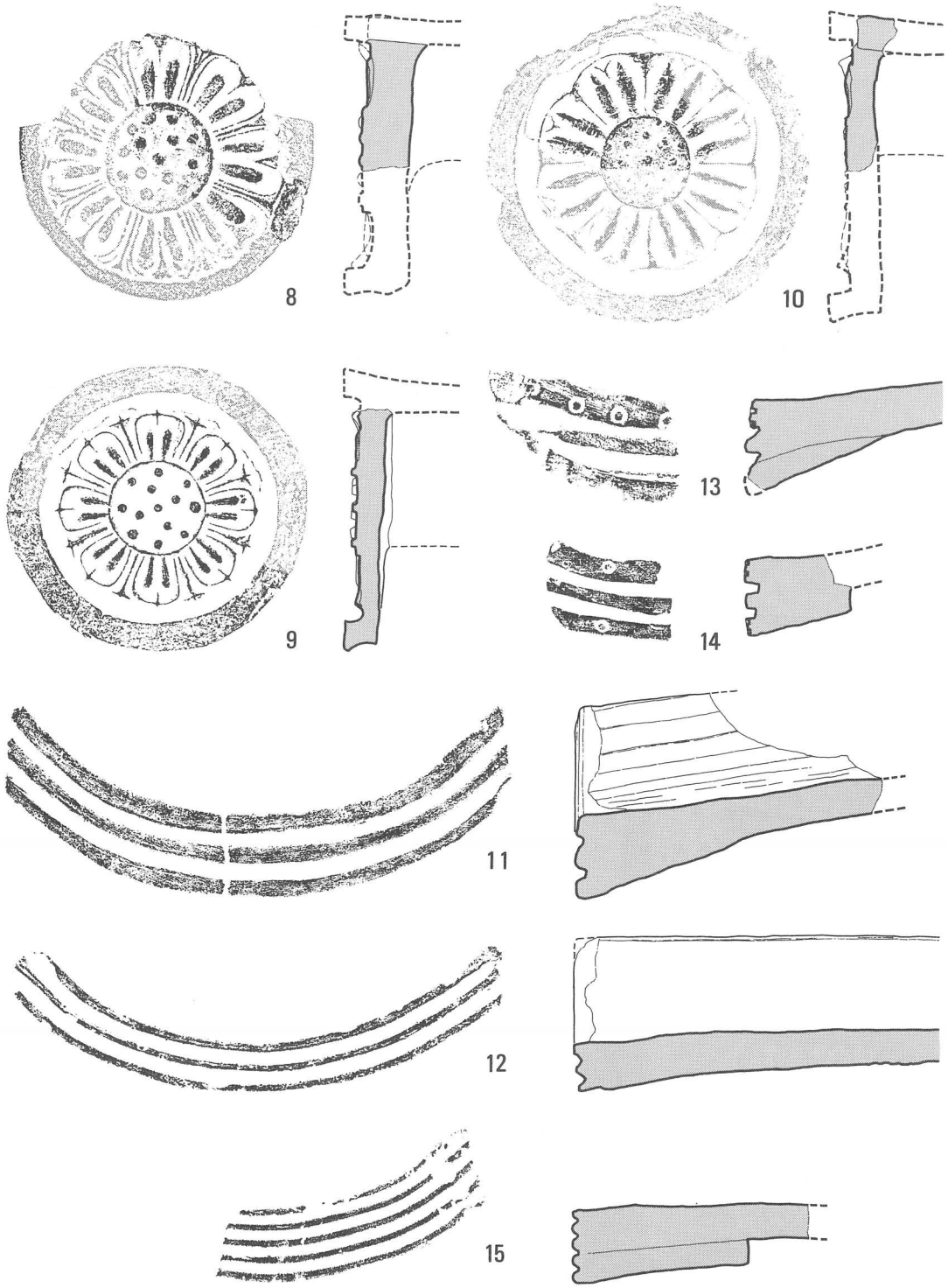
東西溝SD845は調査区東辺で確認した幅1m、深さ0.5mの素掘り溝である。溝内には多量の瓦が含まれ、その中には竹状模骨痕をもつ丸瓦も多量にあった。
遺物 瓦類、土器・土製品、木製品、石・金属製品がある。

瓦磚類 軒丸瓦、軒平瓦、榿先瓦（第45・46図）、鷗尾、熨斗瓦、面戸瓦、塼のほか整理箱240杯分の丸瓦・平瓦が出土した。

軒丸瓦Ⅰ型式には、瓦範の傷みがほとんどないⅠa(1)、主に中房に傷みが生じたⅠb(2)、範傷が最も進み外縁の広いⅠc(3)があり、瓦当はこの順で厚くなる。またⅠaは丸瓦の凸面だけを削って接合するが、Ⅰbは凹面あるいは凹凸両面を削り、Ⅰcは凹凸両面と端面に刻みを入れて接合する。4はⅥ型式で、今回の調査で出土したものによって中房蓮子は1+5であることがわかった。ⅩⅢ型式も完形に近いものが出土した(5)。外区内縁に線鋸齒紋と珠紋を組み合わせ、外縁は素紋である。複弁蓮華紋にはⅩⅣ型式とⅩⅦ型式(6)のほかに新



第45図 飛鳥寺1992-1次調査出土瓦① (1:4)



第46図 飛鳥寺1992-1次調査出土瓦② (1:4)

型式の併せて三つがある。X VIII型式(8)は弁の形が法隆寺式軒丸瓦に似る。弁端は外縁に接し、中房蓮子は1+4+9である。これは摂津梶原寺跡と同範である。X IX型式(9)は弁端と間弁端が鋭く尖り、中房蓮子は1+4+8である。これは大和姫寺跡と同範である。X X型式(10)は大きな子葉が特徴で、間弁はすべてつながり、中房蓮子は1+8+8である。これは姫寺跡、平城薬師寺と同範である。以上の3型式は外縁がともに素紋縁である。

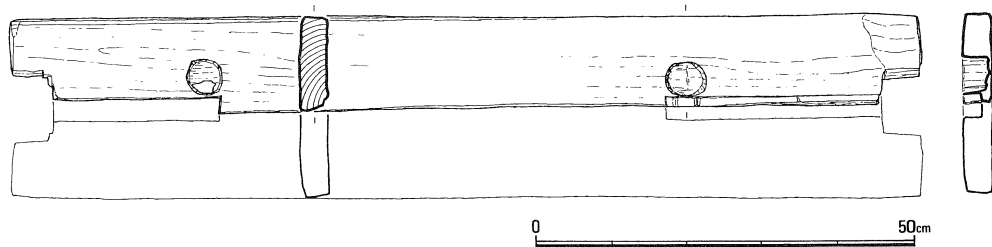
軒平瓦はすべてが桶巻き作りの重弧紋である。三重弧紋のI型式にはA～Eの5種がある。I A(11)は厚手で弧線の太いものである。またI B(12)は弧線の細いもので、隅軒平瓦がある。I C(13)はI Aに似て弧線が太く、上の弧線に竹管紋を押し。I D(14)は太い弧線の上下にまばらな竹管紋を押し、I Eは細い弧線で竹管紋を押しものである。I Dは段顎で、そのほかのものは直線顎である。III型式(15)は五重弧紋である。これは段顎で顎面に縄叩き目が残る。なお『飛鳥寺発掘調査報告』のII・III型式はともに四重弧紋なので、これ以後II A・II Bに改める。

種先瓦は素弁九弁の完形品が出土した(7)。塼は長さ37.5cm、幅24.5cm、厚さ5.5cmの型作り長方形塼である。片面に篋で斜格子を刻む。

丸瓦は行基式の竹状模骨丸瓦が大量に出土した。これは縦位縄叩き桶巻き作り平瓦と組み合う。このほか飛鳥寺創建期の丸瓦・平瓦も多量に出土した。

土器・土製品 土器には土師器、須恵器、黒色土器の他に若干の緑釉陶器、灰釉陶器がある。

須恵器には漆の付着した杯・壺類、硯に転用されたものがあり、土師器には灯明皿等が少量含まれている。また土製品には、土馬が1点、円面硯2点、鞆



第47図 飛鳥寺1992-1次調査出土軸受材(1:5)

羽口等がある。

木製品 調査区南辺で行った下層の調査で、暗灰色砂質土中から多量の木材が出土した。明らかに加工の施されたものと、そうでない自然木とがある。前者は主に建築部材の類で、扉の軸受となる材（鼠走^{ねずばしり}あるいは闕^{しきみ}）等がある。軸受付はかなり小型で、少なくとも寺院の堂に使われたとは考え難い。木材の上層は創建瓦包含層が覆い、また暗灰色砂質土層以下の土層には木材以外の遺物がほとんど含まれない。

石・金属製品 石製品としては砥石、金属製品としては鉄釘などの鉄製品のほか鉾滓が出土している。

まとめ

今回の調査で検出したSB840は、昭和三十一～三十三年の発掘調査で塔、中・東・西の三金堂、講堂、中門、南・西門を確認して以来の礎石建ち基壇建物である。現段階で建物の性格を確定するには至っていないが、東西棟で、西側に犬走り・溝を伴い、またこれら一連の施設が飛鳥寺創建時までは遡らず7世紀後半の築造であることなどから、東門である可能性は低い。昭和五十七年の寺域東北隅の調査で確認した寺域の東限を画する塀SA600の延長線は今回の調査地の東を通り、SB840はそれより内側に位置する。SA600は北で西に8度の振れをもつが、今回検出したSB840、石列SX850、南北溝SD860も全く同じ振れをもっていることは興味深い。また犬走りの縁石と考えられるSX850が築地の基底石であった可能性も残されており、飛鳥寺の東南に築地、溝で画された一郭があったことも考えられる。7世紀後半に飛鳥寺東南で建てられた建物としては、壬戌年（662）三月に道照が建てたとされる禅院（『続日本紀』、『三代実録』）があるが、今回の調査成果だけでは断定するに至らない。

今回の調査成果は飛鳥寺の伽藍、寺域等を考える上で重要な資料を提供することとなった。しかし残念ながら様々な解釈の可能性と多くの問題点を残すこととなった。今後周辺における調査の進展をまって、これらの施設の性格を検討していかねばならない。なおSA600の延長線、東門の確認など寺域東限の確定は今後の最重要課題であるといえよう。

5、飛鳥寺南方遺跡の調査（第1・2・3次）

（平成四年十二月～五年三月）

この調査は、明日香村飛鳥小字藪ノ下に計画された広域下水道飛鳥川幹線管渠第27号発進立坑の掘削に先だち、3次にわたり実施したものである。この工事計画の立案に際しては、飛鳥・藤原地域の埋蔵文化財の破壊を最小限にとどめるために協議を重ね、藤原京の条坊関連遺構や、飛鳥寺などの史跡指定地に立坑を設けることはできる限り避ける方針がとられた。その結果、第27号立坑の位置は、飛鳥寺の史跡指定地外で飛鳥寺瓦窯から南に約150m離れた地点が選ばれ、遺構の有無を探るために南北10m、東西6mの範囲を調査することとなった。ところがこの調査で7世紀末に遡る大規模な石組溝が発見されたため、関係諸機関と協議し、立坑の位置を南東へ移して遺構の保存を計るべく第2次調査を行った。第2次調査は、前回検出した石組溝の南延長部を確認するために、東西13m、南北8mの不整形の調査区を設けて実施したが、この調査区でも石組溝の続きと、それより古い石組暗渠を検出するに至った。第27号立坑予定地は、丘陵沿いで遺構密度が比較的低いのではないかとして選定されたのであるが、大規模な遺構が複雑に重複していることが確認されたのである。しかし迂回路や工事基地に必要な用地を確保できる場所がここ以外には求められないこともあって、立坑の位置を移し、遺構を保存することはきわめて困難な状況となった。そこで再度協議を重ねた結果、次善の策ではあるが、当初の立坑予定地全域を調査し、発見された石組溝・暗渠などの重要な遺構の工事期間中の解体撤去と、工事終了後の復原という案が提出された。第3次調査は、立坑の掘削によって破壊される範囲全体を調査するために、第1次調査区と重複する東西9m、南北12mの発掘区を設けた。調査総面積は245㎡である。

今回の調査地周辺は、飛鳥寺と伝飛鳥板蓋宮などの歴代の宮殿が営まれた重要な地域のほぼ中間にあたり、周辺における近年の調査成果と、『日本書紀』の記述等を総合すると、7世紀中葉以降の大がかりな都づくりがこの地域にも及んでいたことが明らかになりつつある。しかし、その遺構の実体については

未調査部分が多いために謎に包まれ、また適切な遺跡名も与えられていないのが現状である。小字名をつけるなどの案も考えられたが、遺構が小字藪ノ下の範囲にとどまらない大規模なものと推定されたため、本概報ではとりあえず飛鳥寺南方遺跡と仮称することとした。その範囲は、北を飛鳥寺の寺域南限、南を伝飛鳥板蓋宮などの宮殿遺構の北限（未確定）、東を酒船石が所在する丘陵、西を飛鳥川によって囲まれた平地部とし、そこに存在する7世紀代を中心とする遺構群の総称とする。したがって、今回検出した石組溝等は、この飛鳥寺南方遺跡の東を画す基幹排水路として位置づけられる。

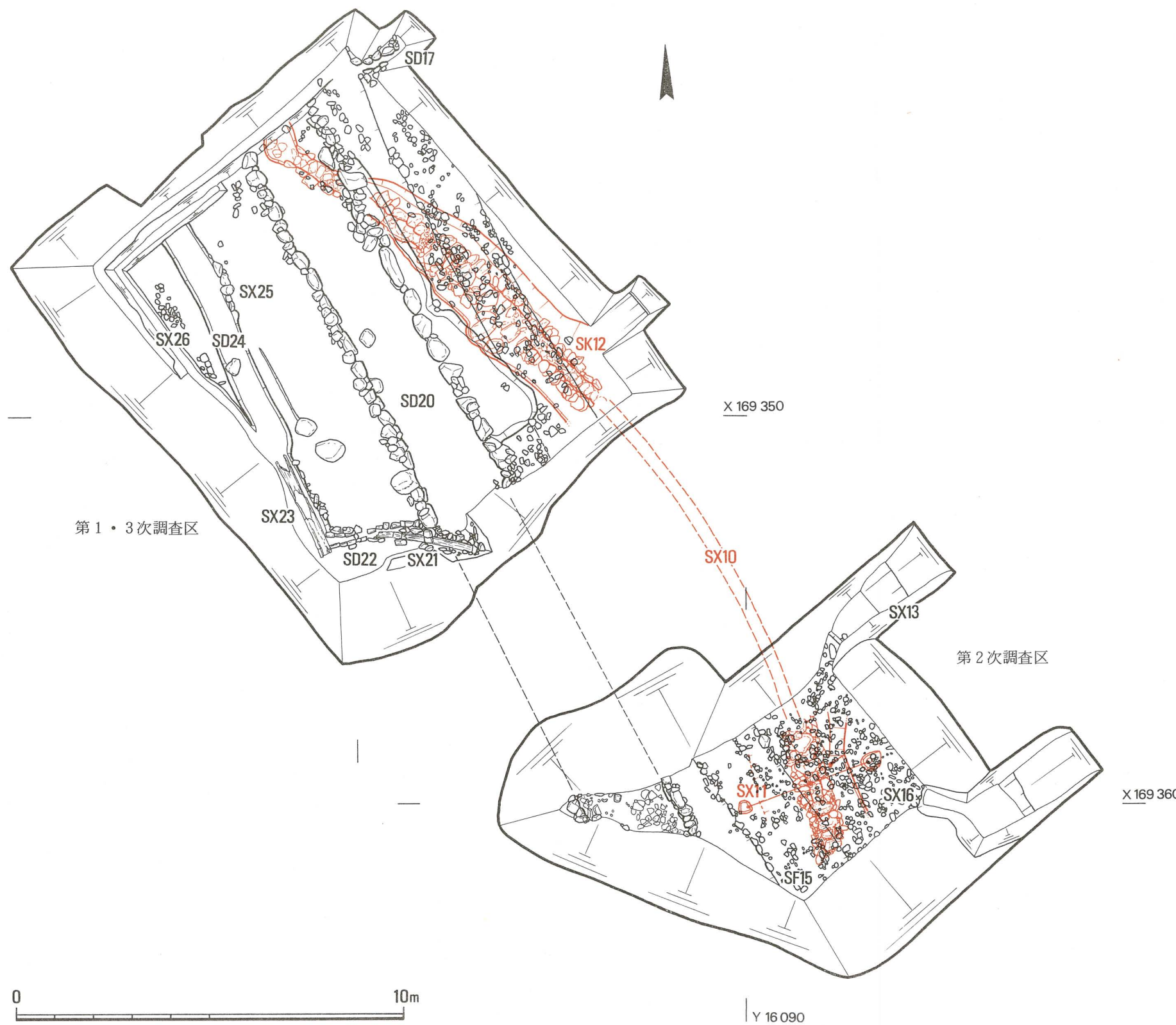
遺構

調査地は、酒船石や飛鳥寺瓦窯が存在する丘陵西斜面に接した村道と水田にまたがる。道路部分には厚い盛り土があり、これを除去して旧道と旧水田の耕土・床土に達した。床土の下には上から青灰色粘質土層と黄灰褐色粘質土層の厚い堆積があったが、ほとんど遺物を含まない。この下には石組溝の埋没後に堆積した大量の砂層があった。これを掘り下げて石組溝を、黄灰褐色粘質土層を取り除いて石敷舗道や石敷などを検出し、その下層で石組暗渠や柱列を検出した。今回検出した遺構は、7世紀中頃から平安時代初めにかけてのものであるが、大きくA～C期の3時期に分けられる。

A期 石組暗渠SX10と、東側の丘陵岩盤を削った傾斜面SX13がある。

石組暗渠SX10は、丘陵西斜面を大規模に削る土木工事をともなって構築されており、幅・高さともに約0.8m、全長24m以上で丘陵沿いに緩く弧を描きながら西北方向に延びる。工事は、まず丘陵から続く花崗岩岩盤を削って傾斜面SX13を設け、この傾斜面沿いの岩盤と地山の粘土層を掘り込んで幅約2m、深さ約0.8mの掘形をうがった。ついで、その中に人頭大からひとかかえほどの玉石を3段ないしは4段積んで両側石とし、蓋石を置いて大小の川原石を隙間に詰める。底には平らな玉石を1列から3列敷きつめるが、第3次調査区の中央部の1.5mほどの間は、削り出した岩盤を直接底とし、その北約1mの間は拳大の玉石を敷く。内法の幅と高さはともに0.5mほどで、内部には細かい粘土と砂が水平に堆積していた。各層ともに炭の碎片がかなり含まれ、また細長い木片が数

Y 16 100



第48図 飛鳥寺南方遺跡第1・2・3次調査遺構実測図 (1:125)

片出土した以外に遺物は認められなかったが、最下層の粘土の微遺体分析を天理大学附属天理参考館の金原正明氏に依頼した結果、両層ともベニバナの花粉が大量に含まれていることが判明した（97頁の報告参照）。なお第2次調査区の石組暗渠は、柱列SX11の柱掘形によって蓋石が外されている以外、遺存状況は良好である。しかし第3次調査区では、その大部分が石組溝SD20の設置にともない破壊され、また土坑SK12によっても壊されており、中央部のごく一部で蓋石が残っていたにすぎない。その他の部分では側石や底石だけが残っていた。暗渠掘形と上を覆う整地層から7世紀前半の土器が少量出土しており、丘陵斜面の掘削と暗渠の設置が、7世紀中頃に遡ることを示している。

B期 石組溝SD20、木樋SX21・23、石組溝SD22、木樋抜き取り溝SD24、石列SX25、石敷SX26がある。

A期の石組暗渠は、花崗岩岩盤を掘り崩した黄褐色山土を用いた整地層で覆われている。その上には丘陵上から流れ込んだ土砂が堆積した状況が土層観察の結果得られた。B期の石組溝SD20は、この堆積層上面から掘り込み、幅4mほどの掘形を設けて側石を積む。深さは最大で0.8m、溝底の幅は広いところで2mほど、狭いところで約1.7mである。両岸には長さ1.1m～0.6mほどの大型の花崗岩を1段、またはひとかかえ大から人頭大の玉石を2段から3段積んで護岸する。溝内に大小の石が大量に堆積していたので、石積みはさらに1段ほど高かった可能性がある。また第2次調査区では両岸から幅1mの間に砂岩切石や玉石を用いた底石が認められた。この溝の全長は21m以上に及び、ほぼまっすぐ延びているが、このまま北進すれば丘陵にぶつかるので、今回の調査区の少し北で西北方向に曲がると推定される。この石組溝からは、7世紀末から8世紀初めにかけての土器が大量に出土しており、溝として機能していた時期の中心がその頃にあることを示している。なおこの溝はC期にも存続する。

木樋SX21・23は、玉石を並べて石組溝SD20の水をせき止め、木樋を利用して水を北へ流す暗渠である。木樋SX21は、幅15cm、厚さ11～13cm、長さ205cmの木樋Aと、幅14cm、厚さ9～10cm、長さ80cmの木樋Bの2本を連結して石組溝から木樋SX23に水を取り入れる施設。木樋Aの石組溝内に入る部分に蓋

板はなく、両側の立ち上がり部分も低い。木樋の両側は砂岩の切り石を並べて補強するが、木樋SX23と木樋Bの間約0.9mの間には玉石を敷いて底石とし、両側に砂岩の切石を並べて幅0.1～0.2m、深さ約0.3mの石組溝SD22とした部分がある。蓋石らしいものは木樋Bに接した玉石1個しか認められず、この部分が開渠となっていたか、暗渠となっていたのかは確認できなかった。

木樋SX23は、幅30cm、厚さ22cm、長さ270cmの材に深さ11～12cm、底幅12～18cmの溝を穿ち、幅30cm、厚さ10cmの蓋板をのせたもので、石組溝と並行し北へ水を流す。石組溝SD22との接続部分には深さ11cm、上幅37cm、下幅7.5cmの逆台形の切り込みを設け水を取り入れるが、南側の小口を塞ぐ装置は認められなかった。北側の次の木樋との接続部分には、両側と底を浅く彫りくぼめた仕口があるが、別材を木樋の接続部分に当て、漏水を防ぐための工夫と見られる。また木樋の接続部分には玉石をいくつか敷いて不等沈下を防いでいる。木樋はさらに北へ延びていたと推測されるが、抜き取り溝SD24によって抜き取られている。なおこの木樋内の堆積土も金原氏に微遺体分析を依頼したが、寄生虫卵などは検出されなかった。

石列SX25は、ひとかかえから人頭大の玉石を並べたもので、大部分が失われているが、石組溝SD20の西約2mの位置に並行して設けられていたと思われる。石はやや傾斜をもって立てられているので、石組溝の西側に幅約2m、高さ0.3m程度の堤があったと推定される。その西側にある石敷SX26は抜き取り溝SD24と小溝群によって壊されているが、かつては石列SX25の西、つまり木樋SX23の上は石敷で完全に覆われていたと推測される。

柱列SX11は、A期の石組暗渠SX10の蓋石を一部壊してつくられた掘立柱の遺構である。柱間寸法は1.7m等間で、調査区内で柱根2箇所と柱痕跡1箇所を検出したが、建物になるのか塀になるのか不明である。

C期 石組溝SD20東の石敷舗道SF15と、小規模な石組溝SD17、第2次調査区で検出した石敷舗道の東にある石敷SX16がある。これらの遺構は、石組溝SD20の東側に丘陵からの土砂がかなり堆積してから設けられたものである。

石敷舗道は石組溝から約1m東にあり、幅約1.4mの間に玉石を敷きつめ、両

側に見切りの玉石を並べたもの。石組溝SD17は、丘陵からの雨水を舗道を横断して石組溝SD20に流す施設である。石敷SX16は玉石を粗く敷いたものであり、凹凸が激しい。この石敷上から9世紀末から10世紀初めにかけての土師器が出土しており、この頃までこの石敷などが機能していたことが判明した。

遺物

土器・瓦・埴輪・土製品・木簡・砥石・砂岩の切石などがあるが、その大部分は石組溝から出土したものである。もっとも多いのは土器で、古墳時代から平安時代初めにかけての土師器・須恵器、平安時代の緑釉陶器などがある。量的に多く、まとまっているのは7世紀末から8世紀初めにかけてのいわゆる藤原宮期の土師器・須恵器であり、なかに漆が付着した土器が少量含まれる。奈良時代の土器はほとんどみられず、平安時代初めの土器が少量ある。瓦は、重弧文軒平瓦が2点と丸・平瓦が少量あり、重弧文軒平瓦のうち1点は川原寺や飛鳥寺所用のものと同じである。丸・平瓦の中には飛鳥寺所用と思われるものがある。土製品には土馬3点と、鞆羽口がある。木簡は14点（うち削り屑9点）出土した。紀年を有するものはないが、文書木簡とみられるものが含まれている。砂岩の切石は、伝飛鳥板蓋宮や、最近では酒船石北方遺跡の石垣遺構に多数使われていることが判明したものと同質同形で、なかには斜面を削り出したものもある。石組溝SD20の砂層から破砕したものが多数出土したほか、第2次調査区で検出した石組溝SD20の底石には26cm四方の切石が使われている。

まとめ

今回の調査では、7世紀末から平安時代初めまで存続していた大規模な石組溝や、7世紀中頃に遡る石組暗渠などを検出した。全体の規模や用途は明らかでないが、石組溝は上流の雨水などをまとめて飛鳥川に流す施設、石組暗渠や木樋は、下水あるいは上水を流す施設と考えられる。飛鳥寺の西から南にかけては、木樋・土管・石組暗渠など、水の利用にかかわる多様な形態をもつ遺構が集中する特殊な地域と考えられてきた。今回検出した石組溝や石組暗渠はそのなかでも最大の規模があり、重要な役割を果たしたものと考えられる。特にB期の石組溝SD20は全長21m以上に及び、東の丘陵地帯から流れ出る雨水等

を集め、北へ排水するための基幹排水路として機能していたことが確認された。またまわりに石敷や石列をもつ堤、石敷舗道などが順次作られ、この地域の遺構群の東限を画す施設として長い間機能していたことも判明した。この石組溝SD20は、国土方眼方位に対して北で西に30度近く振れており、ほぼ真北方位をとる飛鳥寺や伝飛鳥板蓋宮跡関連の遺構とは大きく異なる。このまま北進すれば10m足らずで丘陵にぶつかるので、おそらくは大きく西に曲がり、飛鳥寺の寺域を避けてその南を通り、飛鳥川に水を導くものと推定される。今回の調査区の西北では石垣や底石をともなう池や石組溝が検出されており（飛鳥京跡第28次調査）、地形や構造から推定すると一連の遺構かと思われる。また今回発見した石組暗渠や石組溝は、基本的には自然地形にしたがって築かれており、これまで一部で想定されてきたような飛鳥地域の方格地割の存在が、少なくともこの地域には認められないことが確認されたことも成果のひとつに数えられよう。さらにA期の石組暗渠SX10の堆積土からベニバナの花粉が大量に検出され、上流にベニバナから抽出した染料を利用した染織に関する工房の存在が考えられるようになった成果も大きい。周辺地域の調査の進展を期待したい。

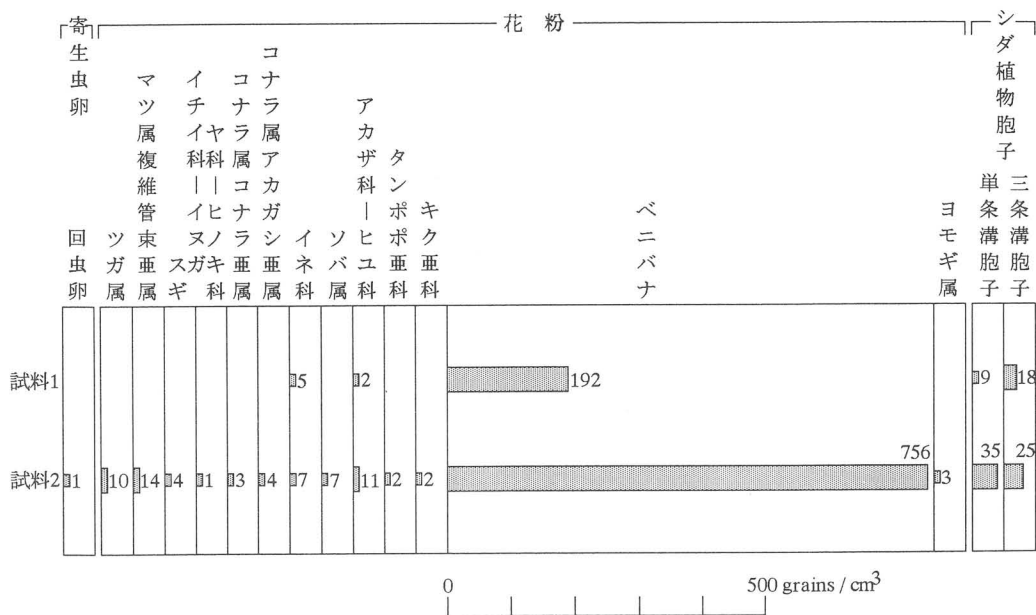
石組暗渠SX10内堆積土の微遺体分析

第2次調査区で検出した石組暗渠内下層の淡灰褐色粘土の南側部分（試料1）と、北側部分（試料2）の2試料について良好な分析結果が得られたので報告する。方法は金原「花粉分析および寄生虫」（『藤原京跡の便所遺構』）にしたがい、花粉と寄生虫卵を対象とした（第49図）。

寄生虫卵は試料2から回虫卵が1個検出されたが、通常の汚染範囲であり、遺構の性格を限定するものではない。花粉遺体はベニバナ *Carthamus tinctorius* Linn.の花粉が特徴的に多く、堆積土1cm³中に試料1で192個、試料2で756個という出現量を示す。他は試料2に食用となるソバ属の花粉があるのを除けば、通常出現する風媒花植物の花粉が少量含まれるのみである。

ベニバナ花粉は、花粉量が少なく分析に反映されにくい虫媒花であることを考慮すると、近くの畑などで栽培されていたものからの供給とみなすには相対的に出現量が多すぎ、ベニバナの花序を多量に使用する染織の廃液など特殊な

供給源に求めるのが妥当であると考えられる。他にヒノキの木材組織片が多く含まれていた。(天理大学附属天理参考館 金原正明 環境文化研究所 金原正子)



第49図 花粉・寄生虫卵組織図

6、小墾田宮の調査 (1992-1次)

(平成四年九～十月)

この調査は倉庫改築工事に伴って明日香村豊浦で実施したものである。調査地は小墾田宮推定地の一面にあたり、東西6m、南北3mの調査区を設定して調査を行った。なお今回の調査区の北に接して第1次(昭和四十五年)、西に接して第2次(昭和四十八年)の調査が行われている(『報告』I、『概報』4)。

調査区の土層は、上から盛土(厚さ0.4m)、旧耕土、床土、暗褐色土、茶褐色土とつづき、地表面から約1.1mで暗茶褐色砂礫土上面にいたる。調査では、この暗茶褐色砂礫土上面から掘り込まれた土坑状の落込みと、それよりも新しい斜行溝(幅約1m、深さ0.3m)を1条検出した。これらは7世紀後半頃の遺構であろう。なお中世の小溝などは、茶褐色土上面から掘り込まれていた。

